

奏



2012 SPRING Vol.37



公益財団法人 日本室内楽振興財団



# 座談会



左より根岸さん、丹羽さん、三宅さん、藤田さん

## 今、「助成」について改めて考えること。

日差しに春を感じさせるものの、まだ真冬のような寒さが残る三月の昼下がり。当財団の関係者の方々に東京・紀尾井町のホテルニューオータニにお集まりいただき、「助成」をテーマにいろいろな視点からご意見を述べていただきました。

アメリカなどでは、特に助成と  
いわずに当たり前前のごとして  
寄付をする——藤田

藤田 今日、財団のことに  
限らず、助成についていろいろ  
なお考えを聞かせて頂きたい  
と思います。まず、「助成」と  
いう言葉を広辞苑で調べてみ  
たのですが「助けて成就させ  
ること」「力を添えて成功さ  
せること」という二つの意味が  
書かれてありました。そうし  
たことから何かを成し遂げ  
る、または成功するように助  
けるということが本来の意味  
だと思えます。

丹羽 なるほど。早速です  
が、助成というのは誰がする  
かということも重要なポイン  
トになるように思います。税  
金によるものや民間の力、ま

たアメリカのように個人によ  
る寄付などもあって、誰が助  
成するかによって受ける側の  
意識も変わるのではないで  
しょうか。

藤田 そうですよ。特にア  
メリカなどは、特に助成とい  
わなくても当たり前前のごを  
やっているような感じで寄付  
をするでしょ。例えば国公立



藤田さん

のオーケストラなどは、アメ  
リカにはないですからね。個人  
私財で作ったオーケストラも  
あるし、その他には寄付金で  
支えられているものも多い。ま  
た、アメリカでは文化的な寄  
付には税金がかからないです

庁などは多額な金額を要とす  
るところを助成すればいいし、  
私的な機関は少額のところを  
支援するとか…。



三宅さん

丹羽 そうですね。民間の場  
合は、対象の選び方が自由だ  
という利点があるので、それ  
を生かしてできればいいと思  
いますね。どこかに限定する  
というのは国ではやりにくい  
ですからね。

根岸 私もそれは感じます。  
国という大きな組織があり、一  
方では個人もある。またその  
間には自治体などの様々な組  
織もあるのですが、日本室内  
楽振興財団の場合、民間なの  
である程度自由ですから、二  
人だけの室内楽でも十分ケア  
できるという面もあると思う  
んです。そういう意味でも  
とても重要な仕事をしていると  
思いますよ。

三宅 ただ、やはり財団とし  
て音楽家を助成するには、あ



根岸さん

る程度の集客力も必要だと思  
いますね。例えば、二〇〇人収  
容のホールなら半数程度の座  
席は埋めて欲しいと。ただ問  
題は、これがおそらく助成の  
ポイントになると思うのです  
が、赤字補填型ということ。つ  
まり申請書提出時に意図的に  
赤字を増やして助成してもら  
うという傾向があると思うん  
です。これでは本来の助成  
の意味にそぐわないように思  
うのですが…。

根岸 そうですね。助成金交  
付の必要条件の最初に挙げら  
れているのが、いま三宅さんが  
仰った事業に関する経費不足

ですからね。そんなネガティ  
ブな条件をクリアするより  
も、もっとポジティブな方向に  
持っていければいいと思いま  
す。足りないから補うという  
よりも、さらに頑張ってもら  
うための助成があってもいい  
かなと思うんです。



丹羽さん

他には、助成のための事務手  
続きが大変だというネガティ  
ブな要素もあるようです。な  
また集める人を雇うためのお  
金があるとか…。

よね。でも、日本の場合は免税  
の枠がある。だから、助成する  
側もそれ以上の寄付は必然的  
にしくなってしまう。そう  
考えるとアメリカ方式はいい  
なあと思うのですがね。

丹羽 その税金の問題です  
が、日本では二十年以上前か  
ら、企業メセナ協議会に加盟  
している各企業から助成を受  
ける場合には、協議会の選考  
委員会が企画内容を検討した  
上でお墨付きを出し、その上  
で国税庁に申請すれば、寄付  
を免税にするという仕組みに  
なってきました。そうした  
意味では、寄付から税金を取  
ることを避けようという動き  
があるのではないのでしょうか。

ネガティブな条件をクリアす  
るよりも、ポジティブな方向へ  
もっていきたい——三宅

三宅 公益財団法人のタイプ  
には、事業型と助成型の二種  
あると思うんですよ。助成も  
事業といえは事業の一つなので  
しょうが、コンサートやオペラ  
を開催するというのと、助成  
とは少し違うと思います。日  
本室内楽振興財団は、実際に  
コンクールを主宰する事業の  
部分と室内楽の団体に対して  
助成するという両方を実践し  
ているような状態ですよ。

根岸 後は調査研究などもあ  
りますね。

丹羽 事業型か助成型の一方  
だけに特化しているというと  
ころは少ないように思います  
ね。また、助成を実施する公  
共財団の基金は、文化庁のは  
五〇〇億円位で各民間は大体  
二〇億円くらいだと思います。

三宅 基金の規模をみると公  
的なものと私的なものはあき  
らかに差があるので、ターゲッ  
トを絞った方が良いのではな  
いかと思います。例えば、文化

## PROFILE

敬称略

### 【藤田 由之】(司会)

1930年生まれ。東京第2師範学校本校、東京音楽学校選科ピアノ科修了後、東京芸術大学音楽科卒業。在学中1951年から近衛秀麿に指揮法、管弦楽法を師事。近衛管弦楽団、ABC交響楽団の打楽器・ピアノ奏者を務め、1957年ABC室内管弦楽団を組織。指揮者となる。1958年ABC交響楽団を指揮してデビューし、以後ABC交響楽団、ABC室内管弦楽団等を指揮。1960年イムベリアル・フィルに所属。1962年読売日本交響楽団の初代楽団主事に就任。1965年以降フリーで、指揮、編曲、評論等に従事。1976年文化庁より、芸術文化行政指導者として欧米に派遣され、オーケストラ及び歌劇場の調査研究を行う。ABC新人コンサート・オーディション審査副委員長、サントリー芸術財団顧問。編曲多数。訳書「タクトと霧ペン」他。

### 【丹羽 正明】

音楽評論家。1955年東京大学文学部美学科卒業。読売新聞社文化部嘱託として文化面に音楽評を40年以上執筆。元、東京音楽大学教授。前、那須野が原ハーモニーホール館長。現、平成音楽大学客員教授。三菱UFJ信託芸術文化財団他の理事。明治安田クオリティオブライフ文化財団他の評議員。「コンセルマロニエ21」審査員長。「日伊声楽コンクール」審査員。日本オルガン研究会会員。音楽ペンクラブ会員。

### 【根岸 一美】

1946年埼玉生まれ。東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。大阪音楽大学専任講師、大阪教育大学助教授、同教授。大阪大学文学研究科教授を経て、2010年より同志社大学文学部任期付教授。大阪大学名誉教授。著書に「ブルックナー」、共監著に「ブルックナー／マーラー事典」「音楽学を学ぶ人のために」、訳書に「ギンター・ヴァント」等がある。毎日新聞等に音楽評を寄稿している。

### 【三宅 幸夫】

1946年東京生まれ。音楽学者・音楽評論家。慶応義塾大学名誉教授。早稲田大学理工学部卒業、ドイツ・チュービンゲン大学修了(Magister artium)。著書「ブラームス」(新潮社)、『歴史のなかの音楽』(平凡社)、『スフィンクスの嘆き—パッサの生涯と作品』(五柳書院)、『音楽家の言葉』(五柳書院)、『菩提樹はさざめく』(春秋社)ほか





**丹羽** でも、そこはちょっと難しいと思うんですね。なぜかというと、音楽活動が社会的に認知された機能を果たしているとする、チケットの売り上げで出演費や会場費、宣伝費などの必要経費が賄えるはず。そうなる助成金は必要なくなりますからね。

**根岸** それもよくわかるのですが、日本室内楽振興財団の助成には、そもそも室内楽の水準向上を図るといってお題目があるんですね。ですから、普及させて水準を上げるというポジティブな意味での助成も

少し考えてもいいのではないかなと思うんですよ。また、助成の申請が少ないというのも問題点のように思います。財団の予算からすると、もっと助成できるはずですが、結果は毎回控えめなんですね。要するにもっとポジティブな意味で働きかけて宣伝していかないと、結局、乏しい申請状況に留まってしまうように思いますが。

**三宅** 若い弦楽四重奏団などに何年間か助成するというのはいかがでしょうか。

**丹羽** 恒常的に活動している若いクアルテットとかトリオの存立のために助成金を出すというのは、とても良い援助になると思いますね。

**根岸** 助成金があるからクルテットを組織して積極的に演じていくというのもあっていいと思いますね。資質的に優れた人が集まって、その力

量が何らかの形で認められたら支援するという。多少賭けの要素もありますが、ある種先行投資的な助成もあってもいいのではないかと思います。

**三宅** それこそが、本来、日本室内楽振興財団の助成の意図に合っていると思いますね。

**藤田** ただ、先行投資するにも必ず活躍するという確証がないわけでは……。

**根岸** そうですね。ただ、確証が持てないのは、音楽大学の教育システムにも問題があると思います。学生時代はな



かなか自主的に音楽活動を行うことができないので、こちらもこれから活躍するかどうかを見極められる機会がほぼないという状態ですからね。

**藤田** 最低一回は演奏会をしてそれが好評だったという過程を経ないとね。

**三宅** まさにその通りだと思います。

**根岸** 学生の室内楽活動を支援することはできるのでないでしょうか。たとえ二、三年の期間だとしてもそうした機会があるというのは大きいと思うんですよ。申請の状況が非常に乏しく、財団の予算にはゆとりがあるという状況であれば、もう少し育成という部分に力を注いでもいいのではないかと思います。

**丹羽** 申請が活性化していないのは、当財団の活動が周知徹底されていないというのでもあるのではないですか？

**三宅** それもあると思いますね。一つの道筋と

して育成という面もあっていいのではないかと思います。それから、単発のものであっても素晴らしい才能はちゃんと支援していくようにしたほうがいいと思いますね。ただ、現状では育成のシステムがちゃんとできていないという問題もありますけどね。

**丹羽** その昔は、貴族たちが芸術活動を支援していて、それが現在では企業が社会的な富を再配分する形として財団になったわけですね。ですから、支援される側がいなければこうしたシステムは成り立たないので、卑屈な態度で助成をしてもらうのではなく、堂々と申請すればいいと思いますね。財団の助成理念として、企業で儲けたお金が芸術活動の支えになるというのは、企業の社会的な存立の基盤や名譽を維持しているということをお互いに理解して

**卑屈な態度で助成を受けるのではなく、堂々と申請してもらいたい**——丹羽

**丹羽** その昔は、貴族たちが芸術活動を支援していて、それが現在では企業が社会的な富を再配分する形として財団になったわけですね。ですから、支援される側がいなければこうしたシステムは成り立たないので、卑屈な態度で助成をしてもらうのではなく、堂々と申請すればいいと思いますね。財団の助成理念として、企業で儲けたお金が芸術活動の支えになるというのは、企業の社会的な存立の基盤や名譽を維持しているということをお互いに理解して

が必要があると思います。**根岸** 助成される側が卑屈にならないというのは、非常に重要なことだと思います。ただ、先ほどの助成金申請の必要条件に戻ってしまうのですが、まず掲げているのが事業に関する必要経費の不足というネガティブな部分があるので、資金がないという状態でない助成が受けられないという体制になっている。むしろ財団が、良い活動なのだから支援しようというポジティブな方向で助成できたらと思いま



す。

**藤田** 受ける側がどう捉えるかということも考えなければいけません。助成した側もその結果がきちんと出せているかというところまで、責任を持って考えることが大切だと思いますね。

**丹羽** また、社会的に見た場合、公益法人が支援した公演というのは、ある意味で良質のものだと保障しているわけですね。そうしたことも意識した方がいいと思いますね。

**三宅** 支援によって開催した公演をDVDなどに撮って提出していただくと、今後の参考にもなりますし、力量などもわかりやすくなりますね。

**丹羽** ある財団などは、助成した公演を振り返って評価した上で、改めて年間賞を贈るやり方をしてるところもあります。そのように再度詳細にチェックして、優れた公演を顕彰するというのもいいと思

いますね。

**助成の申請内容をちゃんとグループ分けしておいたほうが良いと思う**——根岸

**根岸** 助成の申請のタイプですが、大きく分けて二通りあると思います。一つは音楽を演奏する人たちが申請するというもので、もう一つは、あるプロの団体を呼んで演奏会を開催したいので助成金が欲しいというもの。そういう意味で、ある種のマネージメントを助成するというものが、結構たくさんあるんですね。

**藤田** 逆に言うと、それくらいしか申請しようがないのかもしれないですね。

**根岸** だけど、本来はやはり演奏活動の助成が主体ですね。また、第二項目には室内楽に関する調査研究というものもあって、研究活動も助成の対象になるのですが、そちらのほうは、極めて申請が少ないんですね。そういう意味では助成の申請内容をちゃんとグループ分けしておいたほ



うが、申請がしやすいと思うんですよ。

室内楽の“室”を提供するという助成は、とても大切だと思いますね

根岸

丹羽 コンサートの切符を買い取って、聴衆の参加を募って配布するという方向で助成しているところもありますよね。この方法だと、客席は埋まるし、参加する聴衆者も嬉しいと思うので、面白い助成方法の一つだと思います。

根岸 若い人の室内楽は、なかなか聴衆集めは困難ですから、そうした支援は良いかもしれませぬ。さらに、小ホールでのコンサートの助成も認めると良いかもしれませぬ。



藤田 ただ、小ホールといってもなかなか難しく、丁度良いサイズのホールを探すとい

うのは結構難しいことかもしれないですね。また、小さくてもホールでコンサートをする限りは、六〇〇程度の座席を埋めなくてはいけないと思いますが、それはそれでなかなか難しい…。



根岸 小さなホールでも探せばいろいろなタイプがあると思いますし、決して不可能ではないと思います。それに、そうした活動の助成をすることで、室内楽の認知度や可能性も広がっていくのではないかと

丹羽 例えば、科学館のロビーや講堂、ちよつとしたギャラリーなど、特に演奏会場ではないスペースで開催する場合もあるようです。そのような露出していくことで、もっと室内楽が一般の生活に溶け込んでいけばいいと思いますね。極端にいえば、誰でも聞くことができ演奏できる

確かにありますよね。助成申請書には曲目を書く欄もあるのですが、その欄にそうした創作をバックアップできるようなものが取り上げられていたら、その部分をしっかりと支援していくとかね。

丹羽 場合によれば、グループが新作を委嘱する委嘱料を肩代りするとかね。

三宅 なるほどね。

根岸 ところで、助成する場合、謝金はどういう位置づけになるのでしょうか。

藤田 クアルテットに値段を付けるというのは難しいですよ。ね。

丹羽 他財団の申請を見ると、演奏会の予算書に自分たちの出演料もちゃんと計上しているのもあるんですよ。その根拠は、年間に支払われる楽団員に対する給料ということなんです。プロのオーケストラは、一般的にそうした申請の仕方をしていますよね。

根岸 だから、申請者本人には謝金という形の助成はないという考え方が、少しわからなくなってきた…。

根岸 そうですよ、ちゃんと仕事をしているわけですから。いろいろな意味で、もう少し助成に関する考え方を、おおらかにした方が良いのかもしれないですね。



アピールして活性化させ、質の良い助成活動をするのが、今後の課題ですね——藤田

根岸 経費の中では、やはり会場費というのが大きいのし

というように、そんなふうになるようなバックアップができていいと思いますね。

藤田 ただ、マネージャーが室内楽を呼んで、そこにピアニストを加えるというようなことをやらないようにしてはいいかと思えますね。現状では、ピアニストがお客様を集めてマネジメントのお手伝いをするというケースも随分あるんですね。だから、室内楽を呼んでくれること自体は歓迎だけれど、マネジメントのお手伝いまでするような結果になってしまおうというのはいけないと思えますね。

根岸 やはり中間項が存在するようなものに対する助成ではなく、直接的なものではないかと思えますね。

丹羽 室内楽を振興させるための方法としては、ホールを固定してしまうというやり方もあると思うんですよ。決まったホールで、室内楽の活動を継続的に助成していくと、次第にホール自体に固定客がついてくるという効果も期待できる。さらに、演奏会などをシ

かかってくるね。

藤田 そうですね。それなのに、会場費をまともに請求してくる場合は少ない…。

根岸 会場費というのは領収書も付いてくるし、ある程度客観的に確認できるものなのにね。よく考えてみると、助成の金額というのは会場費にとっても近い金額だと思うのですが、いかがでしょうか。

三宅 確かにそうかもしれませんがね。

根岸 だとすると、活動する場所を提供するという助成もあるのではないかと思います。極端な話、謝金などは皆さん平等なので出さないと。謝金というのはご自身の力量でお客様を集めて入場料で賄ってくださいと割り切ってしまう方法もあるのではないかと。そうなると、申請の審査も非常に簡単になるので、もっと助成を受けていただきやすくなるように思います。できるだけたくさんの方に助成の申請をしていただきたいと思っています。また、助成を受けた人たちが、どのような思いでレス

リーズ化して続けていくと、名のある演奏家などが気軽に演奏をかってでてくださいというところもあるんですよ。彼等にすれば、指慣らしという感覚かもしれませんが、聴衆にとっては優れた演奏が聴けるといいうのは、とても有難いことですよ。



根岸 確かに演奏会をする時に痛切に感じるのが、場所をちゃんと確保できるかということなんです。室内楽の、まさに、“室”を提供するということは、とても重要だと思います。

丹羽 あと、室内楽の振興には創作支援というのもあると思うんです。どこのクアルテットが新作を創作委嘱する場合、その作曲料を補填することで、新たな才能を伸ばすという効果にもつながるのではないのでしょうか。

根岸 そういう広がり方は、

ポンスしているのかということにもとても関心がありますね。この助成が、室内楽の振興においてどのように生きていくのか、その効果も確かめたいと考えています。

三宅 そのためには、もっと助成の告知をすることが必要なのではないですか？例えば、この冊子で告知して募集し、その結果を必ずリポートしていただいて掲載するというのも一つの手だと思えますね。

根岸 そうですね。その後に向けての宣伝にもなりますし、活性化させるには良い方法ですよ。

藤田 上手にアピールすることで申請を活性化させ、そして、日本室内楽振興財団ならではの質の良い助成活動をしていくことこそ、今後の課題ですね。本日は皆さま、貴重なご意見を有難うございました。





# 音楽文化をささげよう

大和ハウス工業株式会社

本社総合宣伝部 業務管理室 室長

三澤

義一

大和ハウス工業株式会社は「共創共生」という企業理念を掲げ、事業の方向性を総合生活産業と位置づけ、音楽ジャンルにとどまることなく広く文化芸術へも熱い支援の手を差し伸べています。

今回は、その外部への支援の実情と社内のモチベーションの高揚など、企業の社会的使命に寄り添いつつ爾々と進めている支援についての考え方を伺いました。



## 共創共生

私たちの価値観を根底から覆した大震災から一年余り。ここに改めて被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

大和ハウス工業の歴史は一九五五年に発した創業商品「パイプハウス」で幕を開け、さらに一九五九年、プレハブ住宅の原点とも言える「ミゼットハウス」の発売を持って大きな飛躍を遂げた。プレハブ住宅のパイオニアとして今日までの地歩を固めて来たと言える。昨年の災害後、当社では業界団体の要請を受け、グループ全体で一万一千戸弱の応急仮設住宅を完成させた。正に本業

を通じて社会に貢献出来たと

誇りとするところである。

当社は企業理念に、「共創共生」共に創る。共に生きる。

「総合生活産業」と位置づけている。このコーナーの表題「音楽文化をささげよう」を考えると、このことがキーワードだと考えている。民間企業が「文化をささえる」と身の丈に合わせることや、つもりは無いけれど気概だけは失わない会社でありたいと考えている。共に創るもの、それはプロダクトとしての「家」だけではないと思う



石橋信夫記念館文化フォーラム

からだ。

当社が主催や協賛をする文化活動の中で最もユニークなものは二〇〇八年から開始し、現在まで継続的に実施してい

る「石橋信夫記念館文化フォーラム」であろう。奈良の地に当社創業者の足跡を辿るミュージアムを開館し、それを記念して始まったこのセミナーは、毎年盛夏の頃、東京・大阪の当社社屋のホールで実施される。毎年一貫して歴史から学ぶことを主題に両会場それぞれ四名のパネリストを招いて闊達なディスカッションを繰り広げてもらう。第一回のテーマは「聖徳太子なら今の日本をどう活性化するか」。パネリストには梅原猛さん、堺屋太一さんなど各界から気鋭の論客にご参加頂いた。現在準備中の今年のテーマは「敗戦の焦土から高度成長に躍進した「日本」に

何を学ぶか」である。

## オーケストラの支援活動

本稿の主題とも言える「音楽」文化への取り組みについてもご紹介しておきたい。当社では在阪四オーケストラの一つ大阪交響楽団への応援を二〇〇六年から継続して来た。一九八〇年創立の同楽団は創立三十周年の節目を機に楽団名を「大阪シンフォニカー交響楽団」から現在の名称に変更された。このシンフルな命名にはクラシック音楽の世界で大阪を代表して行くと言う気概と矜持を感じる。大阪発でグ



大阪交響楽団クリスマスコンサート

ローバル化を推し進める当社の姿勢とも一脈通じるのである。「聴くものも、演奏するものも満足できる音楽を」がモットー。昨年のクリスマスには当社が協賛の橋渡しをさせて頂いた会員の皆様を本社のホールにお招きし、手作り感一杯のコンサートを開催した。

## 上質な人生、上質な文化

当社が主催するイベントを二つ紹介させていただいた。この他にも当社は音楽を中心とする様々な文化、芸術イベントへの協賛には積極的な会社と言えるだろう。企業理念を体現化する大きなファクターと捉えているからである。「共創共生」、上質な人生を、上質な文化を、共に創り、共に感動し、共に高め、共に生きる。このことこそ当社が企業市民として社会との約束を果たせる唯一の道だと考える。そしてもう一つ重要なことは我々社員自身もそれを謳歌しながら歩んで行ける心の余裕を持つことではないだろうか。

そのためにも当社はインナーブランディングを大切に

する。文化芸術への応援は言わば企業が広く社会に向けて発信したメッセージであろう。このメッセージをブランドとして定着させる作業を担っているのは全国の社員達である。言い換えればメッセージは社内に向けて発信したものである。「うちの会社ってワタワタクするよな面白い事やってるよね！」が当社で働くことの誇りや勇気に繋がりが、そこから得られるモチベーションの向上がお客様に伝わり、そして共創共生へ。そんなサイクルが生み出せたらと日々願っている。

さて最後に私事で甚だ恐縮ではあるが、私自身の室内楽への思いについて少しだけ述べさせて頂き、この稿の締め括りとして。

ご縁があつて私自身の業務の中で公益財団法人日本室内楽振興財団のお付き合いが始まった。それまでも音楽は大好きで、無くてはならない生活の潤いではあったのだが、クラシック音楽については全くの門外漢。私と同じように感じて居られる方は他にも沢

山いらつしゃると思うのだが、敷居が高く、「敬して遠ざける」存在であった。フルオーケストラが奏でる著名な作曲家の派手なシンフォニーならこれまでも聴くことはあった。これらの曲たちにはフレンチのフルコーラスのごとき「喰いごたえ」があったのである。私は若いので（と勝手に思っている）その位カロリー高めでない物足りないと思っていた。対して室内楽はもっと静謐な世界で言わば茶懐石のごとき領域だから、もっと老成して枯淡の域に達してから楽しめば良いと考えていたのである。しかしながらそれは大きな誤解であった。財団とのご縁で様々な楽団の演奏に接する機会を得た現在、正しく「牙え返る」思いで一杯である。室内楽に難しいルールは無い。大家から気鋭の若手まで、重厚から軽やかさまで、聴き手が心を緩やかにし、自由な世界に身を置いて気の向くまま楽しめば良かったのだ。呪縛から自らを解き放った今、今年は何のような音色との出会いが待っているのか。楽しみで仕方がない。



# 奏でる よろこび

## 言葉に表しきれないモノ

ダイキン工業株式会社 東京支社  
コーポレートコミュニケーション室 経営IRグループ  
(兼) 広報グループ担当課長

山田 香織

私と太鼓の出会いは一九九四年。会社に入社した翌年、仕事にも慣れ何か始めたいと思っていたときに自宅のある茨城県の地域情報紙で和太鼓の会「筑鼓（つくどん）」の初心者講座の記事を目にしたのが始まりだった。もともと音楽好きで、ドラムなどの打楽器に興味があった私は即座に応募し、生まれて初めて生の和太鼓に触れた。ただシンプルに「叩く」という行為

だけにもかかわらず何か楽しい。未だ明確な答えは持っていないが何か感じるものがあり、そのままのメンバーとして十八年間続けている。私は初心者講座の四期生として入会し、現在は十三期生を迎えるに至っている。

和太鼓の会「筑鼓」は茨城うたこえ協議会の主催する和太鼓講座に参加したメンバーにより、一九九二年七月に結成され



【山田香織 (やまだ かおり) ・プロフィール】  
1971年茨城県生まれ。  
1993年、筑波大学医療技術短期大学部衛生技術学科(現・筑波大学医学群医療科学類) 卒、同年4月、ダイキン工業株式会社入社、MEC研究所ME開発室で臨床検査技師として臨床検査薬の開発業務に携わる。1996年11月からはME部マーケティング課にてMR・販促業務に従事。2000年4月、広報部に異動。同社の首都圏における知名度・認知度アップのため、広報・宣伝活動やブランド構築に向けた「空気に関する意識調査」などの情報創造に携わる。2007年7月、コーポレートコミュニケーション室経営IRグループにてIR業務を担当、2010年5月、コーポレートコミュニケーション室の担当課長、現在に至る。本業の広報・IR業務の傍ら2003年から7年間は労働組合役員を兼務。現在、新入社員研修、女性活躍推進のプロジェクトメンバーでもある。臨床検査技師、介護福祉士。

た。幾分滑稽に響く名前の由来は、筑鼓の十八番である『三宅島木遣り太鼓』の「ツクドン、ツクドン」というリズムに、我々の活動の中心である「筑波(現・つくば市)の太鼓グループ」の意味を絡め、筑波の「筑」と太鼓の「鼓」で「つくどん」と命名された。年齢も職業も異なるメンバーが「太鼓を叩きたい」という一つの思いで結ばれたサークルで、昔から地元根付く伝統的なお囃子保存会やブ口集団でないため、設立当時の運営費はほとんどゼロ。器用なメンバーが家にあつた白をくりぬき、太鼓屋に持ち込んで皮を張ってもらった。そのたった二つの宮太鼓で練習をスタートし、一つの太鼓で演奏できる曲から練習を重ね少しずつ活動範囲



つくば市の夏の風物詩「まつりつくば」のねぶたパレードにて

一番多かった時期でメンバーは約三十名、繁忙期には老人介護施設や保育園の夏まつりなど年間に四十件に及ぶ演奏依頼をこなす会となった。結成十年を迎えた二〇〇〇年には地元の市民ホールで二〇〇〇人の観客を前にコンサートを開き、今

では我が会から独立したメンバーや市民講座で教えた受講生たちが新たに太鼓団体をつくるなど、派生団体を持つほどの規模となった。

筑鼓は毎週土曜の夜が練習日。私の二十代の土曜の夜は、そのほとんどを太鼓の練習に費やした。その当時つき合っていた人や友達からは「太鼓と自分とどっちが大事なんだ」とよく詰問された。ある時期はそれだけで飽き足らず、日曜は別な会の練習にも参加し、筑鼓では保有することができない大太鼓を練習した。平日も当時通勤で利用していた車で、信号で止まっていたハンドルの叩いた。基本的に音の強弱だけでリズムを作り上げる太鼓演奏では利き腕とそうでない腕とのバランスが大事になる。当時は、利き腕でない左手で箸を持って食事する生活を送っていた。

三歳からピアノを習ったものの、殆どモノにならず十一歳のときあつげなく止めたが、幼い頃からおもちゃのギターをままたごのおおもじで三味線風に弾いたり、中学時代には授業中に

無意識で筆箱を鉛筆で叩き、先生に怒られるような子ともだった。幼稚園では鼓笛隊でベルリラ、小学校では合奏クラブで大太鼓、中学でも吹奏楽部に所属しユーフォoniumなどの楽器を経験したが、今でも楽譜を読むことは得意でない。太鼓の曲を作るときには奏法や音程・音色などを言葉におきかえた「口唱歌」で作譜していく。筑鼓は、下は十代から上は今年六十九歳を迎えるメンバーで構成されているので、楽譜よりも口伝えの方が共有しやすい理由もある。また我々のようなパフォーマンズでも見せる太鼓の場合、その場の雰囲気などで次の叩きだしを決める「阿吽の呼吸」を大事にするため、わざと楽譜にしないこともある。

これまでピアノやフラメンコ、空手の型やストリートダンスとコラボしたことがあるが、ストリートダンスとのコラボでは、最初タイミングが合わずに苦労した。先に渡したデモテープでダンスを組み立てた彼らと初めてリハーサルをしたとき、どうしてもある箇所の間が合

わない。よくよく彼らに聴いてみると、もらったデモテープよりその小節が四小節長いという。デモテープとの違いに気づいた私はメンバーに「そのところ、ンタンタンタンタを少し削って」。その言葉だけでぴたり合うというようなことがある。

太鼓を始めて七、八年目頃はまだまだ演奏に余裕がなく、伝えたい想いだけが先にたっていた。演奏依頼でいくら拍手喝采を浴びても自分の中で何かもやもやした。力任せに叩くばかりだったのか、一年間でバチを六本折った時期もある。そんな頃ある小学校に演奏依頼で訪れたとき、子どもから「こんなことして何が楽しいんですか?」と言われたことがあった。その時は悔しくてたまらなかつたが、その言葉をきっかけに「伝えるとは何か」を考え始めた。それまでは何かを伝



老人介護施設の演奏後、施設利用者からお礼の花束をもらう

えたい、自己表現したい気持ち強く、そもそも音楽を楽しむというのを忘れていたらしい。

そんな私も年を重ね自らの成長とともに、音そのものを楽しめるようになったのだろう。演奏依頼で老人介護施設に行くと、最初は音に驚いて混乱を起こすお年寄りもその響きとリズムに一抹の懐かしさを思い出すのか、最後には泣いて喜んでくれる人も多い。感動を与えようとするより、よほど感動を与える演奏ができるようになってきたように思う。

去年の震災後は音楽の力が新たに直された年だった。筑鼓も結成二十周年を超え、今年はいよいよコンサートを開催したいと企んでいる。私にとって「奏でる」とは想いや感動の共有。言葉では表しきれないコミュニケーションを双方方向で行うことで、より多くの人に元氣と感動を伝播し続けたいと思う。





# 音楽雑感



大阪大学大学院文学研究科教授

伊東 信宏

伊東信宏（いとう のぶひろ）プロフィール  
一九六〇年京都市生まれ。大阪大学文学部卒業。同大学院修士（文学博士）などに進学。大阪教育大学、大阪大学准教授などを経て、現職。著書「バルトック」（中公新書、一九九七年）で吉野秀真賞、「中東欧東の回廊」（岩波書店、二〇〇九年）でサントリー学芸賞を受賞。また朝日新聞NHK・FMで演奏会評、解説を担当している。

## 「東欧演歌」？

昨年「旧東欧地域における『演歌型』大衆音楽」に関する研究会を立ち上げた。略称「東欧演歌研究会」。サントリー文化財団と科学研究費補助金の助成による。

「東欧演歌」というのは筆者の造語である。いつかこの欄でも書いたと思うが、筆者はここ数年、ブルガリアの「チャルガ」というジャンルのポピュラー音楽に取り憑かれている。これは一九八九年の体制転換以降、若者たちの絶大な支持を受けているジャンル（そしてインターネットや良識ある市民からは下品で扇情的だと評判の悪いジャンル）で、「ポップフォーカ」とも呼ばれ、元来は民謡をポップに味付けしようというものだった。だが、近年はもう民謡、民俗音楽的な要素は薄れてしまい、いわゆる欧米のポップスとほぼ区別がつかない歌も

多い。それでもブルガリア語で歌われる国内消費向けのポピュラー音楽であることには変わりがない。そして、ふと気がつく、近隣の諸国（つまりバルカン半島の「東欧」ということになる）には、同種の音楽が色々ある。旧ユーゴのスロヴェニアから来ている留学生に聞く

と、この種の音楽は「ターボフォーク」と呼ばれてやはり非常に人気があるらしい。ルーマニアに行くと「マネレ」と呼ばれるジャンルがあつて、これも近年盛り上がっている。その他、トルコの「アラベスク」や、ギリシアの「レンベーティカ」、アルジェリアの「ライ」など、似たようなジャンルが各国にある。その一方で、ハンガリー以北の国々（チェコやポーランドなど）にはこの種のジャンルは見当たらない。第二次大戦後、同じように社会主義時

代の情報統制を経験し、同じように一九八九年の自由化を経験したはずだが、その後一方で欧米のポップスとは違う独自の民族色を持ったポップスが流行し、他方ではその気配がない、というのは面白い現象だ。

また各国で二応別々に発展してきたこれら「ポップフォーカ系」大衆音楽は、最近国境を超えた動きを見せてもいるようだ。たとえばルーマニアにコステイ・イオニツァという歌手がいる。彼はロマのポップシンガーなのだが、自身歌手として有名になった後、プロデュース業も始めてむしろそちらで大成功している。ロマの音楽家は、上記のチャルガでもマネレでも大きな役割を果たしているが、彼の場合はロマ色をあまり表に出さないとところが少し変わっている。そして、プロデュースという点ではルーマニ

アの枠を超えてブルガリアやセルビアの歌手と組んで大ヒットを飛ばした。ファン層が比較的内向きで、国境のすぐ向こう側で似たような歌が流行しているも、この種の交流はなかなかだけに、この脱国家的、超国境的な活動は注目される。

この研究は一人の人間にはちよつと手に余る。そもそも東欧各国は言語がそれぞれ異なるので、例えばハンガリー語とルーマニア語の両方について、俗語的な表現も含む歌詞を正確に理解してそれを比較する、というだけでも至難の業だ。ましてやそれをブルガリア語やクロアチア語に拡張して行うというのは不可能なので、いきおい共同研究、ということになる。筆者自身、これまで中東欧地域の文化に関する共同研究に参加してきたこともあつて、身の回りにこの地域の研究を

する人が結構揃っている。全員が「音楽」の専門家というわけでもないのだが、声をかけてみると皆さん興味を持ってくれて、旧東欧の各国について言語が出来る人が揃い、共同研究の体制が整った。これに加えて、昨年同僚として迎えた阪大准教授の輪島裕介さんは、もともと南米の音楽の研究をしていて、その後ワールドミュージック論等を展開し、最近演歌の本を出した売れっ子である。この東欧の大衆音楽を思い切って「演歌」と呼んでしまつて、世界的な大衆音楽の文脈の中で考えてみたらどうか、というのが今回の研究会の基本的な発想なのだが、これも輪島さんの本を読んでいて生まれたものである。どうも日本の演歌と、東欧各国の様子を比べていると、「演歌」的現象というの

は、資本主義のある種の発展段階において出てくるものなのではないか、という気もする。実際、コプシの回し方といい、歌われている内容といい、共通する部分は少なくないのだ。そういうわけですでに、予

備的な調査項目について各国の様子をレポートにまとめてもらい、何人かのメンバーが報告をおこない、若い人たちは現地に調査に出かけてきた。予備的調査というのは、中心になるレーベル／このジャンルを専門的に扱う機関誌、雑誌の有無／このジャンルが聴けるライブハウス、ホール、クラブ／中心的インターネットサイト／このジャンルに特化したラジオ、テレビ局、音楽祭など／マネジメント会社、プロデューサー／代表的な歌手、グループとそれぞれの履歴、アルバム、楽曲名、簡単な特質など／代表的な研究者／主要参考文献といった項目について、国ごとにざつと調べてもらう、ということである。



セルビアの国民的歌手、ツェツァのDVD

た上畑史さん（茅野市民館勤務）が紹介してくれたセルビアの象徴的歌手ツェツァのキャリアは、とても興味深い。以下、適宜アレンジしながら要約してみよう。  
「ツェツァ」はスベトラナ・ラジュナトヴィッチは一九七三年、セルビア南部の町、プロクプリエの生まれ。一九八八年、国营音楽制作会社のサポートを受け、十五歳で最初のアルバムを発表し、大ヒット。九五年にユーゴスラヴィアの秘密警察

された。アルカンは九〇年代のユーゴ紛争時にセルビア義勇親衛隊タイガーを組織し、戦闘に従事、民族主義的なセルビア人から英雄視されたが、二〇〇〇年にベオグラードで暗殺された。ミロシェヴィッチ政権下、犯罪塗れのアルカンとの結婚と、それに続く夫の死は、ツェツァの人氣に影を落とすどころか、ターボフォークの象徴的存在としての彼女のクリスマ性を一層助長した。また、彼女の豊胸や口唇整形、民族的・国民的英雄との結婚などは、彼女以後のターボフォーク歌手のイメージ形成に大きな影響を与えた。」

UDBAの庇護を受けながら、ヨーロッパ全域で恐喝、詐欺、密売、強盗、殺人、襲撃、暗殺などに関わっていた犯罪者として知られるアルカン（本名ジェラルド・ラジュナトヴィッチ）と結婚し、結婚式はテレビで中継

こういふ調査から浮かび上がってくるのは、やはりこの種の音楽の圧倒的にかがわしい（しかし心情的には切実な）背景である。研究会メンバーの一人、ベオグラードに留学してい

た上畑史さん（茅野市民館勤務）が紹介してくれたセルビアの象徴的歌手ツェツァのキャリアは、とても興味深い。以下、適宜アレンジしながら要約してみよう。  
「ツェツァ」はスベトラナ・ラジュナトヴィッチは一九七三年、セルビア南部の町、プロクプリエの生まれ。一九八八年、国营音楽制作会社のサポートを受け、十五歳で最初のアルバムを発表し、大ヒット。九五年にユーゴスラヴィアの秘密警察

された。アルカンは九〇年代のユーゴ紛争時にセルビア義勇親衛隊タイガーを組織し、戦闘に従事、民族主義的なセルビア人から英雄視されたが、二〇〇〇年にベオグラードで暗殺された。ミロシェヴィッチ政権下、犯罪塗れのアルカンとの結婚と、それに続く夫の死は、ツェツァの人氣に影を落とすどころか、ターボフォークの象徴的存在としての彼女のクリスマ性を一層助長した。また、彼女の豊胸や口唇整形、民族的・国民的英雄との結婚などは、彼女以後のターボフォーク歌手のイメージ形成に大きな影響を与えた。」

彼女が汎バルカンの人氣を誇るが、一方でクロアチアやボスニア・ヘルツェゴヴィナでの人氣は社会的な論争を呼んでもいる。彼女を戦争犯罪者である、と見る人もいるからである。こういう歌手の音楽をどうんなふうに対処することができるのか、途方に暮れるときもあるが、反面音楽学にはまだまだやるが残されている、とも思う。



# 北京国際コンクール弦楽四重奏観戦記

音楽ジャーナリスト

渡辺 和

昨年九月十六日から二十四日まで、北京でアジアで二つ目の国際弦楽四重奏コンクールが開催された。膨大な人口と加熱する中産階級の教育ブームで、西洋音楽の裾野が猛烈な勢いで広がる中国は、弦楽四重奏の世界でも台風の目になり得るのか。今回はいつものレポートとは趣をかえ、取材日記を抜粋しよう。北京の混沌たる熱気が伝われば幸いである。

## ◆九月十六日(金)

### オープニング・セレモニー

成田から北京首都空港に到着。小雨交じりの曇り空。金曜夕方の北京市内は相変わらずの猛烈な交通渋滞で、西端のホテルで午後六時半から開催されるセレモニーにギリギリで滑り込む。審査委員長ベトヒヤが意外に本音っぽいスピーチをし、続いて党の要人が紹介され、事務局長が喋る。四年毎に弦楽四重奏をやるって仰ってる。

カメラマンが取り囲み、籤引き。キローガ、マタンギ、ツァイデー、ウー、ヤック、スヌエツト、シンプリ、ケレマン、レオニス、ハウスマンの順で弾くことになった。キャンセルしたのはルスなど三団体。まあこんなものは、ここでもまた完成度を高めている。弾くたびに成長するのはスゴイ。独奏者としても活動するケレマンが、妻と妹、弟子と組んだ団体に、細部にはいろいろ課題はあるが音楽のアービル力は図抜けている。レオニスQやハウスマンQなど、パソフ大会などに顔を出す面々の真つ当な音楽作りがかすんでしまうほど。

休憩時間に、忙しそうに動き回っているディレクターのツァン氏に話を聞く。中国にはピアノやヴァイオリン、歌のコンクールしかない。クラリネット、フルート、チェロ、それに弦楽四重奏のコンクールを行うことでオーケストラの水準を上げたいとのこと。私財をなげうって運営するこのコンクール、過去三年の成果を国からも認められ、今回からは協力も得られるようになった。毎年、科目を変えながら行うので、次回の弦楽四重奏開催はまた四年後(毎回メルボルンと重なることになる)。大阪国際室内楽コンクールを勉強したいという真摯な気持ちに、どう応えたものか。

だろう。ベトヒヤと参加団体が記念撮影をやり、続いて全員影が大好きなのである。



レセプションでの写真撮影。審査員と参加者が一同に会す。

## ◆九月十七日(土)

### 一次予選第一日

事務局から深夜にメールが入り、今日使うツェムリンスキーの楽譜を持ってないか尋ね

九月十九、二十日のロマン派と中国の新作が課題曲となる第二ラウンド。新作は地元団体が有利な中国音楽の響きに溢れた楽譜だった。セミファイナルへはケレマン、ツァイデー、キローガ、シンプリ、ウー、レオニスが進出。経験が豊富でも演奏にミスがあった団体が涙を飲んだのは、コンクールだから仕方あるまい。なお、二十一日はセセッションはお休み。大気汚染が酷い北京には珍しいほどの快晴で、審査員は万里の長城観光を堪能しようだ。



上海出身のヴァイオリニストが率いるウーQは英国ベース。将来が期待出来る。

◆九月二十一日(木)

### セミファイナル

聴衆はそこそこ。上海から学校を休んで来ている連中も、十五年ピアノをやったが大学は

ている。慌てて電話をするがつかまらない。八時過ぎに宿を出ると、北京らしからぬ爽やかな秋の風。開演前に、地元若き評論家でボランティアで雑務に走り回っているY君に無事スコアを渡せた。

天安門広場から直ぐの北京音楽庁、客席に座るのは五十人くらいで、関係者と学生ばかり。八十元の一次予選チケットで二日間全部聴ける。二次予選も同じシステムだ。審査員は一階五列目に並び、審査開始。久しぶりにお姿を拝見する元アルバン・ベルクQのハット・バイエル氏はお歳を召した。フェルメールQを解散したシモル・アシケナージ氏はお元氣そう。北京出身の上海Qのイーウェン・ジャン氏はコンクール規定ではアメリカ人だが、地元が産んだ弦楽四重奏権威者として学生達のアイドルだ。審査員は着々たるメンバー



会場となる北京音楽庁は人民大会堂や国家大劇院の並び。天安門まで直ぐの一等地だ。

だが、傾向の違いがありすぎ、ちょっと心配ではある。演奏では、四年前のボルチアーニ・コンクールでファイナリストになり特別賞を得たスペインのキローガQのハイドンが印象深い。あちこちのコンクールで出会うオランダのマタンギQは、もうすっかり出来上がった響きをどう評価するか難しいところ。問題のツェムリンスキー作品を弾いたのはこの団体だった。若きフランス人レディ集団ツァイデーQは、達者すぎ憎らしいくらい。古来の響きも取り入れた今風のスタイルも安定し、余裕すら感じられる。第一ヴァイオリンが上海出身のウーQは結成して数ヶ月のことだが、イギリスで学ぶ筋の良さは将来が期待出来る。今回の最大の発見

もアンクライマックスではないか。

## ◆九月二十三日(金)

### 本選

聴衆の中にウーQやシンプリQも座った。平土間はかなり埋まっている。アシケナージ氏がお弟子さんと再会を喜んだり、ジャン氏が客席の聴衆に取り囲まれたり、審査員の垣根が低いのは北京流なのかしら。この大会の目的を地元若手音楽家への室内楽振興と割り切れば、これはこれでありだろう。ツァイデーQの精密なベートーヴェン作品二二二は、もう少しゆとりがあれば完璧なのだが、ケレマンQはボルチアーニでは本選に進めずに弾けなかったラズモフスキーの二番を披露。今や世界の若手を席巻するアルバン・ベルクQ流とはひと味違う独特の表現に好感が持てる。



地元期待を一身に集めたシンプリQは実質上の第4位的な扱いだった。

## ◆九月二十四日(土)

### 結果発表及び記念演奏会

昨日以上に聴衆も多い。音楽庁横は駐車場に入りきれない高級車で溢れている。どうもこの街では結果発表と記念演奏会がハイライトのようだ。考えてみれば昨晩の発表は関係者のみだったわけで、一般聴衆が結果を知るのはいくらなのがある。恙なく結果が発表され、ケレマンQがコンクールのステージからさらに自由になったチャイコフスキーを披露。大喝采を浴び、実質の第一位扱い。明日は審査員のコペルマンやキマネンによる特別演奏会がある。北京大会、まだまだ終わらない。

だが、傾向の違いがありすぎ、ちょっと心配ではある。

演奏では、四年前のボルチアーニ・コンクールでファイナリストになり特別賞を得たスペインのキローガQのハイドンが印象深い。あちこちのコンクールで出会うオランダのマタンギQは、もうすっかり出来上がった響きをどう評価するか難しいところ。問題のツェムリンスキー作品を弾いたのはこの団体だった。若きフランス人レディ集団ツァイデーQは、達者すぎ憎らしいくらい。古来の響きも取り入れた今風のスタイルも安定し、余裕すら感じられる。第一ヴァイオリンが上海出身のウーQは結成して数ヶ月のことだが、イギリスで学ぶ筋の良さは将来が期待出来る。今回の最大の発見

## ◆九月十八日(日)

### 一次予選二日目

日曜でも淡々と朝からセッションが進む。韓国のスヌエツトQは綺麗に弾けるがそこからどうするか、一昔前の日本の団体を見るよう。独奏では世界を席巻する韓国、室内楽は成果が上がるにはまだ時間がかかるか。午前のセセッションが終わったところで、明日からの二次は全員が弾くと受け付け横に張り出される。

午後の最初は上海からのシンプリQ、荒削りだが音楽にパワーはある。聴衆も大拍手だ。レズジョ、メルボルンと一気に台風の目になってきたケレマンQ

◆九月二十一日(木)

聴衆はそこそこ。上海から学校を休んで来ている連中も、十五年ピアノをやったが大学は





日本センチュリー交響楽団

今回訪問したのは大阪府豊中市に本拠を置く日本センチュリー交響楽団です。

この楽団は、昭和から平成に移った一九八九年(平成元年)に大阪で四番目のプロの楽団として誕生しました。これまで幾多の演奏会をこなし、府民にその存在感がしっかりと定着してきたなかで、出資母体である大阪府からの補助金が二〇〇九年(平成二十一年)、二〇一〇年(平成二十二年)の二年間は減額、二〇一二年(平成二十三年)には全額打ち切りとなり、楽団運営上の難局と真正面から向き合う事態となりました。

楽団存亡の危機ともいえる局面と対峙する中であって、現状での問題点の整理と解決、さらには将来展望についてお聞きしました。お話を伺ったのは三月末で常務理事・事務局長を引退された野崎明宏氏の後任として四月から楽団長の任に就かれた望月正樹氏です。

楽団の誕生

日本センチュリー交響楽団が誕生したのは一九八九年(平成元年)のことです。大阪府が運営する吹奏楽団「大阪府音楽団」を引き継いで設立されました。

八月には初代常任指揮者にウリエル・セガル氏(現名誉指揮者)が就任、指揮者には小田野宏之、梅田俊明、岡田司の各氏が就任、同年十二月には大阪府が二〇億円の基本財産を出資して楽団が発足しました。

翌一九九〇年(平成二年)二月には一般公募のなかから採用した「大阪センチュリー交響楽団」を楽団名とし、先駆けて行っていた楽団員の採用と相俟って大きな骨組み

が出来上がりました。

活発な演奏会活動

その翌月には大阪府下の四会場が楽団デビューの場になりました。五月にはいずみホールで特別演奏会を始め、また九月にはザ・シンフォニーホールで定期演奏会を始めることになりました。

これらの演奏会以外に、東京特別演奏会、いずみ定期演奏会、京都特別演奏会など広範な活動を展開しています。多様で精力的な演奏会活動は、現在では実に年間約一〇〇公演を数えています。

この間にも一九九二年(平成四年)四月には小泉和裕氏が首席客演指揮者に就任、一九九七年(平成九年)四月には高関健氏が常任指

揮者に、二〇〇三年(平成十五年)四月には三年間首席客演指揮者であった小泉和裕氏が今度は首席指揮者として就任することになりました。その小泉和裕氏は二〇〇八年(平成二十年)四月には音楽監督になり、同時に沼尻竜典氏を首席客演指揮者に迎え、現在の指揮者陣を構成しています。

橋下徹府政の誕生と同時に補助金が見直しの対象となり、二〇〇八年(平成二十年)には四億二千万(平成二十一年)は二億二千万(平成二十二年)は二億二千万(平成二十三年)には全額打ち切りとなりました。橋下知

公的補助金の打ち切りと生き残り策

望月事業部長は次のように語ってくれました。  
三二大震災や九月の台風の影響で公演が中止になるなど、楽団にとっても苦しい二年でした。少しでも早く基本財産を取り崩さない

事誕生の翌年には著名な弁護士・水野武夫氏を理事長に迎え、この事態を乗り切るための緊急体制を敷きましたが事態を打開することができませんでした。大阪府への度重なる陳情と並行して大型スポンサーの獲得、さもなくば小口での相乗りスポンサーの確保も視野に入れて奔走したもののその実を結ぶまでには至っていません。

楽団の経常経費約七億円のうちを占める補助金の大きさをいままさらながら痛感せざるを得ない事態になりました。

二〇一二年(平成二十三年)三月には楽団は内閣府から公益財団法人の認可を受け、新年度に当たる四月からは民間の楽団としての歩みを始めました。その際には基本財産の二十億円は全額引継ぎ、加えて活動エリアの拡大を念頭に置いて「日本センチュリー交響楽団」と改称しました。

補助金ゼロになった楽団の初年度の実績はどうだったのだろうか？

望月事業部長は次のように語ってくれました。

三二大震災や九月の台風の影響で公演が中止になるなど、楽団にとっても苦しい二年でした。少しでも早く基本財産を取り崩さない

で経営が成り立つ方策を考えていきたい。公演回数を増やし、チケット売上増にも力を入れる。そのためには営業スタッフだけではなく、ボランティアスタッフ・支援者を増大するなど、収支の両面から見直す必要がある。二十三年度より、三重、福井、神戸、中国、四国地区などで特別公演を企画し、広域的な活動を展開している。大阪府内では、四季コンサートやJR大阪駅でのエキコンなど地道ではあっても多様な方策で知名度のアップにつなげる方策を展開している。

厳しい状況の中で生き抜いていくためには、唯一無二の楽団になることが不可欠であり、それが営業強化にも繋がると思う。これからセンチュリーらしさを明確に打ち出していきたい。

一方、楽団員、事務局員の給与体系の見直しや、事務局員の契約形態の見直しなどは既に行っており、今後はオーケストラの編成や定数を見直しながら経費の削減に繋がるよう考えたい。

緒についたもの、これからのものも含めて今後の戦略を諄々と語る望月楽団長の表情に、進む以外に道はないのだと決めた心の強さと潔さを垣間見た思いがしました。

「ダラマンプリ・コンサート2011」を終えて アタツカ・クアルテット

アタツカ・クアルテットは、現在アメリカで注目を浴びている屈指の若手弦楽四重奏団のひとつです。古典派から現代音楽まで幅広いレパートリーで、素晴らしいアンサンブルとパワフルな表現力を持っています。

第一ヴァイオリンのエイ



ミー・シュローダー、ヴィオラのルーク・フレミング、チェロのアンドリュウ・イーのほか、第二ヴァイオリンには日本人の徳永慶子さんが参加しており、毎回MCとしてメンバー紹介や曲解説で、会場の空気を

和ませていました。

Aプログラム前半では、アメリカの作曲家J・アダムスの「舞曲についてのジョンの書」が、CDに録音されたプリペ

アードピアノの音とともに演奏され、観客に清新な驚きをもたらしました。またBプログラムのパー

バー「弦楽四重奏曲」は、彼らの素晴らしい表現力によって深い感動を味わうことが出来ました。後半に演奏したベートーヴェンの弦楽四重奏曲第一五番は、室内楽の白眉とも言われる傑作で、五十分という長い演奏時間でしたが、見事な集中力とアンサンブルで聴衆を魅了しました。このコンサートの様子は、十二月二十七日深夜に読売テレビで放送されました。



札幌公演はSTVラジオで放送されました。大分では夜の公演に先立ち、別府大学の学生のために公開リハーサルを行いました。淡路市のしづかホールは初めての開催でしたが、司会として読売テレビの吉田奈央アナウンサーにご協力いただき、学生の団体鑑賞を含め多くの方に来ていただくことが出来ました。東京

では第二ヴァイオリンの徳永さんのご家族が声をかけられたお客様が多数いらっしゃいました。

コンサートの円滑な運営、演奏者へのご配慮についてアタツカ・クアルテットより感謝のメッセージが届いております。全国ツアーに際してご協賛いただいた各社、共催の日本テレビ系列各放送局、また各地ホールのご尽力に対して改めて御礼申し上げます。







## 公益財団法人日本室内楽振興財団 支援企業

大阪ガス株式会社  
関西電力株式会社

アサヒビール株式会社  
サントリーホールディングス株式会社  
ハウス食品株式会社

非破壊検査株式会社

大塚製薬株式会社  
住友化学株式会社  
積水化学工業株式会社  
武田薬品工業株式会社  
日本ペイント株式会社

三洋電機株式会社  
住友電気工業株式会社  
ソニー株式会社  
株式会社東芝  
日本電気株式会社  
パナソニック株式会社  
パナソニック電工株式会社  
株式会社日立製作所  
富士通株式会社  
ローム株式会社

東洋紡績株式会社  
株式会社ワコール

近畿日本鉄道株式会社  
京阪電気鉄道株式会社  
南海電気鉄道株式会社  
西日本旅客鉄道株式会社  
阪急電鉄株式会社  
阪神電気鉄道株式会社

株式会社近畿大阪銀行  
三井住友信託銀行株式会社  
株式会社みずほ銀行  
株式会社三井住友銀行  
株式会社三菱東京UFJ銀行  
株式会社りそな銀行

伊藤忠商事株式会社  
岩谷産業株式会社  
株式会社千趣会  
三菱商事株式会社

株式会社JTB西日本  
株式会社電通  
株式会社ニューオータニ

住友生命保険相互会社  
東京海上日動火災保険株式会社  
日本生命保険相互会社  
三井生命保険株式会社

川崎重工業株式会社  
株式会社クボタ  
新日鐵住金株式会社  
ダイキン工業株式会社  
日立造船株式会社  
三菱重工業株式会社

KDDI株式会社  
西日本電信電話株式会社

野村證券株式会社

株式会社日建設計

株式会社読売新聞東京本社  
株式会社読売新聞大阪本社  
日本テレビ放送網株式会社  
読売テレビ放送株式会社

株式会社大林組  
鹿島建設株式会社  
株式会社きんでん  
株式会社鴻池組  
清水建設株式会社  
大成建設株式会社  
大和ハウス工業株式会社  
株式会社竹中工務店

(関連業種別50音順)

### ■トレヴィの泉とコイン

「トレヴィの泉」は、クイリナーレ宮殿の西側トレヴィ広場にあり、オードリー・ヘプバーン、グレゴリー・ペックが出演したアメリカ映画「ローマの休日」の舞台となった有名な観光スポットの一つです。

この泉に背を向けてコインを投げ入れたら願いが叶うといわれています。コインの枚数が1枚なら再びローマに来ることができ、2枚なら大切な人と永遠に一緒にいることができ、そして3枚なら恋人や夫、妻と別れることができると言い伝えられています。

あなたなら何枚？ 投げ入れる枚数はあなたが決めてください。

ちなみにコイン3枚は、離婚を禁じていたキリスト教圏の歴史の名残を反映した願いといわれています。

(表紙：夕景トレヴィの泉)



ローマ市街

## 平成23年度 第1回理事会、定時評議員会開催

平成23年11月1日付で公益財団法人となって初めての理事会を12月21日(水)、定時評議員会を平成24年1月18日(水) ホテルニューオータニ大阪で開催しました。

理事会、評議員会ともに「平成23年度旧法人最終事業年度(平成23年4月1日～平成23年10月31日) 事業報告及び決算承認」、「平成23年度新事業年度(平成23年11月1日～平成24年3月31日) 事業計画及び予算承認」について諮り、可決承認されました。

また、定時評議員会では、評議員4名と理事1名の選任及び定款の一部変更(公告の方法)についても異議なく可決承認されました。

評議員会で選任された評議員と理事は次の方々です。(敬称略)

評議員 寺田 和義(西日本電信電話)、近田 育満(日本電気)、塚本 満(野村證券)、川崎 浩太郎(ハウス食品)  
理事 竹口 文敏(大阪ガス)

## 平成23年度 第2回理事会、臨時評議員会開催

平成23年度第2回理事会を平成24年3月21日(水)、臨時評議員会を3月27日(火)、ホテルニューオータニ大阪で開催しました。理事会、評議員会ともに「平成24年度事業計画書及び収支予算書承認の件」、「平成23年度臨時評議員会招集の件」及び「特別顧問1名選任の件」(理事会議題)について諮り、異議なく可決承認されました。

また臨時評議員会では「評議員3名選任の件」を諮り、いずれも可決承認されました。

評議員会で選任された評議員と特別顧問は次の方々です。(敬称略)

評議員 山田 文啓(大成建設)、泉本 圭介(大和ハウス工業)、林 和久(日建設計)  
なお、井上孝幸氏(日本ペイント)は今回の臨時評議員会終結のときをもって辞任されます。  
特別顧問 大久保 好男(日本テレビ放送網)



理事会



評議員会

## 平成24年度の助成金交付予定事業決定

平成24年度の助成金交付事業を決定する選考委員会を2月27日(月)に開催し、厳選な審議の結果申請数16件の内から以下の6件が選考されました。

[選考委員] 委員長 藤田 由之 指揮・音楽評論家  
委員 青澤 隆明 音楽評論家  
委員 根岸 一美 同志社大学教授  
委員 三宅 幸夫 慶応義塾大学名誉教授  
委員 横原 千史 音楽評論家

### ■平成24年度助成金交付予定事業

	事業名	申請者	開催地域
1	ウィーン古典派からの弦楽四重奏曲の連続演奏会	鈴木 庸介	川崎市
2	音+ピアノアンサンブルシリーズ Vol.1	村田 千佳	東京都
3	没後50年ブーランクと6人組	湊 さおり	東京都
4	俣野修子室内楽シリーズ“楽興の時” 第4回 ―フランスの作曲家たち―	俣野 修子	大阪市
5	直方谷尾美術館 第8～11回 室内楽演奏会	渡辺 伸治	直方市
6	クアルテット・ウィークエンド 2012～2013	NPO法人トリトン・アーツ・ネットワーク 理事長 長浜 力雄	東京都



街はまるでオーケストラ

# 世界中で奏でられる音 私のお気に入りのを見つける旅

地球上にはあらゆる国、様々な人たちが暮らしています。  
想いを馳せれば、どこかの国のどこかの街で、  
私とは違う時間の流れを過ごしてる事でしょう。  
見知らぬ建築物、違った言語や風習、行き交う人の雑踏まで。  
いきいきとした街の営みに五感を刺激されると、  
それはまるでオーケストラのよう。  
私たちJTBは、そのような特別な旅のお手伝いをしています。



**JTB西日本  
海外旅行西日本支店**

〒541-0058 大阪市中央区南久宝寺町3-1-8(本町クロスビル9階)

TEL.06(6252)2711(代) FAX.06(6252)2790

担当:飛松 智久

●編集・発行／公益財団法人 日本室内楽振興財団

〒540-8510 大阪市中央区城見2丁目2番33号 読売テレビ内

TEL.(06)6947-2183 FAX.(06)6947-2198

ホームページ <http://www.jcmf.or.jp>

e-mail [zaidan@jcmf.or.jp](mailto:zaidan@jcmf.or.jp)